2021 年 11 月 22 日

藤井誠一郎

全国大学政策フォーラム in 登別　参加報告

概要

2021 年 11 月 7 日（日）、ZOOM を利用して「全国大学政策フォーラム in 登別」が開催されました。

通常当該プログラムは、「全国大学政策フォーラム in 登別」として 9 月初旬頃に開催され、全国から学生が登別市に集い、現地に存在する多種多様な課題についての解決策（政策）を提案し、その質を競い合うという形で進められます。2006 年に始まり、政策系、福祉系、工学系等の多様な専門領域のゼミが同じフィールドを分析し、それぞれの視点から課題解決のための政策提言を行う大会であり、その老舗の位置づけとなっている大会です。昨年度は新型コロナウイルスの蔓延により中止となりましたが、大東文化大学のみで「出前講座」という形で大東文化会館と登別を接続して ZOOM で行いました。今年度こそは対面で行えると思っていましたが、感染者数の高止まりが続いていましたので、通常とは異なる変則的な日程で ZOOM を利用して開催されました。

例年のフォーラムでは、2 泊 3 日で登別市内で現地調査、政策立案、発表、公表という流れで進められますが、今年度は、事前に政策案を動画で記録して登別に送り、それを参加者や審査員が事前に視聴したうえで、11 月 7 日のフォーラム当日に ZOOM で概要を説明し、それに対して質疑応答を行ったうえで、審査結果が発表されるという形で進められました。

この登別フォーラムへの参加は、2020 年度より「政治学インターンシップ（政策提言・登別）」、「政治学インターンシップ（政策提言展開・登別）」として単位認定されることになりました。しかし、今年度の受講者は、開催が危ぶまれていた影響からか、2 年生 2 人（菊池伶君、杉野凪さん）、3 年生 5 人（張琨雨君、齊藤太一君、渡邊凌君、永澤息吹君、鈴木道直君）の 7 人にとどまりました。

各大学 2 チームまで出場可能でしたので、今回は 2 年生と 3 年生をシャッフルし、菊池伶君、張琨雨君、齊藤太一君、渡邊凌君でＡチーム（岩橋先生担当）、永澤息吹君、鈴木道直君、杉野凪さんでＢチーム（藤井が担当）としてフォーラムに臨んでいきました。

フォーラムでは、限られた時間の中で調査を行って政策を完成させていくことはもちろん、プレゼン時に使用するパワーポイントまで作成しますので、かなりのハードワークになります。また、提案にあたっては事前の下調べが必要になりますので、参加する学生には相当の負担が強いられることになります。それらを手際よくこなしていかなければならず、自ずとこれらを運営していくマネジメント能力も求められます。よって当該フォーラムには、学生の資質を向上させていくあらゆる要素が凝縮されており、今後社会で必要となるスキルを身に着ける上でも非常に有用な取り組みであると言っても過言ではありません。

今年度のフォーラムで与えられたテーマは、「安心して暮らし続けられるまちづくり！！～学校施設のリノベーションから考える～」です。登別市内に 13 校ある小・中学校に着目し、児童数の減少に伴い将来的に統廃合や集約が想定される状況を踏まえ、学校施設をどのようにリノベーションし利活用すべきかについて政策提言を求めるというテーマでした。

テーマは与えられたものの、現地調査は各参加チームで任意に行うことになっていましたので、8 月下旬に参加者全員で登別市に調査に行く予定でした。しかし、コロナ感染者数が拡大し緊急事態宣言が発せられたため大学からストップがかかり中止となりました。このまま WEB だけを頼りに政策提言を行わざるを得ないかと思っていましたが、その後感染者数が減少しましたので、政策案の提出締め切り日（10 月 20 日）前の 10 月 17 日（日）～19 日（火）に、渡邊凌君、永澤息吹君、鈴木道直君、杉野凪さんが現地視察に行くことになりました。締め切り日前でしたが、現地視察ができたおかげで現状を把握することができ、リアリティを持った政策案を提言するに至りました。

今年度のフォーラムには、8 大学（埼玉大学、立教大学、流通経済大学、青森中央学院大学、金城学院大学、同志社大学、摂南大学、大東文化大学）から 12 チームが参加し、政策提言を行いました。現地視察ができなかったため各チームとも苦戦を強いられましたが、**本学のＢチーム（永澤息吹君、鈴木道直君、杉野凪さん）が、「登別市議会議長賞」を受賞**する結果を残しました。リーダーの永澤君は昨年の出前フォーラムの参加者であり、昨年の感想として、「今回の悔しさを晴らすためにも次回のフォーラムに参加したく思います。次回では現状に即したより現実的な提言ができるよう、日頃から多角的な思考を意識していこうと思います」と述べていますが、今年度見事にリベンジができ、充実したフォーラムになったと思います。

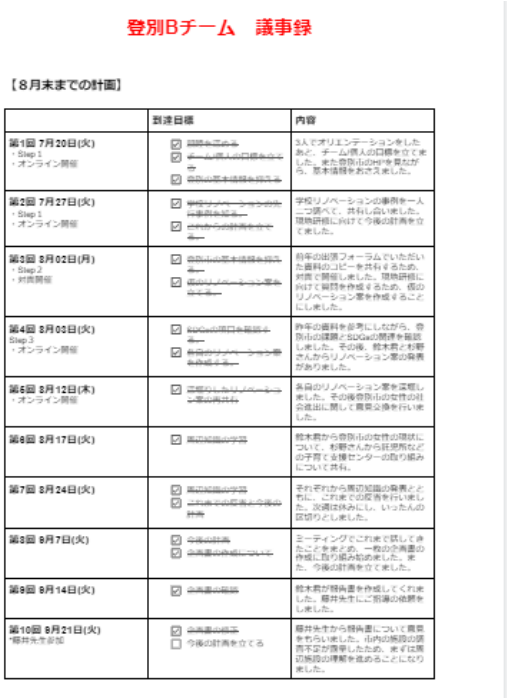
残念ながら A チームは現地視察が充分にできなかったこともあり、惜しくも入賞を逃しましたが、両チームとも一つの事を最後までやり遂げたという達成感や充実感に満たされていたようでした。このフォーラムに参加して大きく成長したのではないかと思います。

政策提言に向けた打ち合わせ

今回のフォーラムは変則的な開催形式となったため、時間的にはかなり余裕がありました。Ａチーム、Ｂチームとも ZOOM を用いて議論を重ね、政策提言に向けた準備を進めていきました。そこでの特筆すべきこ

とは、Ｂチームでは議事録として、次回の打ち合わせまでの To Do リストを作成して議論を深めていた点です。効率的に議論を進めるためには、このようなリストを作ったマネジメントが有効に機能します。藤井が指導してこのようなリストを作ったのではなく、チームで相談してこのような形で運営していました。

これまで政策フォーラムに何度となく参加していますが、このような取り組みが学生の中から生まれてきたことに感動を覚えていました。このノウハウを次年度以降に登別フォーラムに参加するチームは是非採り入れて頂きたいものです。



登別Bチーム　議事録

【８月末までの計画】

	到達目標	内容
第1回 7月20日(火) ・Step 1 ・オンライン開催	☑ [illegible] ☑ [illegible] ☑ [illegible]	3人でオリエンテーションをしたあと、チーム/個人の目標を立てました。また登別山のHPを見ながら、基本情報をおさえました。
第2回 7月27日(火) ・Step 1 ・オンライン開催	☑ [illegible] ☑ [illegible]	学校リノベーションの事例を一人一つ調べて、共有し合いました。現地研修にfitして今後の計画を立てました。
第3回 8月02日(月) ・Step 2 ・対面開催	☑ [illegible] ☑ [illegible]	昨年の出張フォーラムでいただいた資料のコピーを共有するため、対面で開催しました。現地研修にfitして質問を作成するため、仮のリノベーション案を作成することにしました。
第4回 8月03日(火) Step 3 ・オンライン開催	☑ [illegible] ☑ [illegible]	昨年の資料を参考にしながら、登別山の課題とSDGsの関連を議論しました。その後、鈴木君と杉野さんからリノベーション案の発表がありました。
第6回 8月12日(木) ・オンライン開催	☑ [illegible]	各自のリノベーション案を講評しました。その後登別山の女性の社会進出に関して意見交換を行いました。
第6回 8月17日(火)	☑ [illegible]	鈴木君から登別山の女性の現状について、杉野さんから託児所などの子育て支援センターの取り組みについて共有。
第7回 8月24日(火)	☑ [illegible] ☑ [illegible]	それぞれから周辺知識の発表とともに、これまでの反省を行いました。反省は踏みにし、いったんの区切りとしました。
第8回 9月7日(火)	☑ [illegible] ☑ [illegible]	ミーティングでこれまで試してきたことを考えての、一枚の企画書の作成に取り組み始めました。また、今後の計画を立てました。
第9回 9月14日(火)	☑ [illegible]	鈴木君が提案書を作成してくれました。藤井先生にご指導の依頼をしました。
第10回 9月21日(火) *藤井先生参加	☑ [illegible] ☐ 今後の計画を立てる	藤井先生から提案書について意見をもらいました。山内の旅館の調査不足が指摘したため、まずは周辺旅館の理解を進めることになりました。

政策提言に向けた現地視察

今回のフォーラムでは、現地視察は各チームが任意に行う形となっていました。8 月下旬は緊急事態宣言が発令されていたため大学からストップがかかりましたが、奇跡的に 9 月末に解除されましたので、10 月 17 日（日）～19 日（火）に希望者を募り登別に現地視察に行くことにしました。Ａチームからは渡邊凌君が、Ｂチームは全員（永澤息吹君、鈴木道直君、杉野凪さん）が参加しました。

2 泊 3 日の日程で、1 日目は到着後に登別温泉地区の散策を、2 日目はＡチーム、Ｂチームに分かれて政策提言に関する現地調査を、3 日目は出発までの時間を政策案の策定に当てました。Ａチームの渡邊君はチームを代表して参加でしたので、登別で調査した結果を当日の夜に ZOOM にてメンバーに伝えて政策案の策定を進めていきました。Ｂチームは全員参加でしたので、調査後は部屋に籠り、午前 3 時まで政策案の策定を行っていきました。藤井から「19 日の帰京前に政策案を提出して帰ろう」と言われていたため、一定の目途がつくまで深夜に作業を行っていました。その光景はまさに通常の政策フォーラムの時のようでした。

1日目　温泉地区の散策

登別駅に到着。クマに出迎えられる。

登別グランドホテルに到着。

地獄谷を散策

大湯沼にて

2日目のヒアリング・深夜の議論の様子

登別市社会福祉協議会でのヒアリングの様子

地域食道「ゆめみーる」で昼食を摂る

登別市総合支援センターでのヒアリング

幌別東小学校の視察

就労支援センターでのヒアリング

午前３時まで政策案を議論する様子

3日目　出発までホテルにて政策策定

フォーラム当日

11 月 7 日（日）に登別政策フォーラムが ZOOM にて開催されました。参加者には板橋校舎に集合してもらい、教室のプロジェクターで ZOOM 画面を投影してフォーラムに参加する形になりました。

市長の挨拶、実行委員長の挨拶に続き、エントリー順に概要の説明を行っていきました。本学はＡチーム、Ｂチームの順に概要の説明を行いました。既に 10 月 20 日に動画を提出していましたので、2 分間のみの概要説明となりましたが、緊張が伴う時間でもありました。説明後には審査委員からの質問がなされ、他大学からの質問も寄せられましたので、端的に答えていきました。

会場の様子

小笠原市長の挨拶の様子

Ａチーム渡邊君の発表の様子

Ａチーム張君が質問に答える様子

Ａチーム菊池君が質問に答える様子

Ｂチーム永澤君の発表の様子

各チームの政策案

ここで、Ａチーム、Ｂチームの政策案の発表原稿を掲載しておきます。

Ａチーム

登別市の現状として、まず人口が平成７年以降減少しています。国立社会保障・人口問題研究所の予測では、今後もこの傾向は続き、その下がり幅は大きくなっていくと考えられています。

また、登別市の年齢別割合をみると、生産年齢人口と老年人口が９割を占めています。各年齢層を５歳ごとに区分してみると、６５歳～６９歳、７０歳～７４歳、７５歳～７９歳までの人口がそれぞれ３０００人を超えており、合計で10000 人を超え、市においてのボリューム層となっています。

市職員の大内さんのお話によると、定年退職したがまだまだ元気な方々は、町内会活動や市文化センター「のぼりん」で行われている文化講座に参加したり、老人クラブでの自動見守り等社会奉仕活動に参加したりと、意欲的に活動しているそうです。しかし、その方々の雇用先としては、シルバー人材センターに頼っているのが現状だそうです。

今の登別の状況は高齢化が進んでおり、そこでみなさんがより充実に、健康的な生活を送っていただくために私たちが提案するのは、廃校を地元民のための総合施設にすることです。具体的に申しますと、施設のなかに仕事あり、宿泊あり、さらに娯楽も楽しめることがこの統合施設の狙いです。また割合としては仕事４割、娯楽４割、宿泊が２割を想定しています。またこの施設を実現させるためのは、町内か主導の元、地元に住むみなさんに協力していただく必要があります。株式会社のようにみなさんが自分自身で出資により登別全体で作り上げていくことが重要である。

まず、第一に仕事についてです。仕事は人を活発にする、やりがいのある仕事に着くと人は元気になり、こなすべき事があると次へ向かいやすいのです。ただし一口に仕事だと言っても、高齢者ができる仕事は限度があります。重労働はとてもではないができるとは考えにくい。そこで、地元産業を利用してそれらを料理しネット販売で全国へ売り出す。さらに登別全体で老若男女問わず手伝いをすることによりさらなる発展が考えられます。例をあげると酪農の場合ではチーズケーキなどを作りネット販売やふるさと納税の返礼品としても一つの特色になりえる。実際にある事例としては、廃校に企業を招致し生ハム作りをする自治体秋田県大館市があるように地域雇用を生み出しさらには廃校利用問題も解決できるのです。これらのことを総合施設の一角で行うことになります。

我々が提案した産業福祉を基盤とした複合施設で、就労だけではなく娯楽の提供も同時に行なっていく予定です。例えば登別中学校にあるテニスコートを現状利用し、アウトドアスポーツはもちろんのこと、近年注目されている ｅ スポーツやパチンコや麻雀などのできる施設にしたいと思っています。つまりは我々の提案する複合施設で地域の雇用を満たすだけではなく、福利厚生や福祉の要素も満たしていけると思います。また費用に関しましてもゲーミングパソコン自体はスペックを過剰に求めない限りはさしてかかりませんし、パチンコなどの備品は現在コロナ禍の影響で閉店している施設から安く買い取れることが予想できます。仮にそういった施設から買い取れなくともリース契約で極力費用を抑えることはできます。「施設に行けばとりあえず誰かがいる」そんな憩いの場としても活用できると思います。

学校の校舎だったことを利用して宿泊施設やカフェ、食堂としても利用することができる。教室ごとに部屋として分ける事でセキュリティー、プライバシーともに守られる。スポーツ団体が利用する場合は、グランド、体育館もあるため遠征合宿を行う事にも適している。また、壁を取っ払って二つの教室大きな一つの教室にして食堂やカフェとして利用することで宿泊施設として利用する人以外にも楽しんでもらえる。さらに、広大なグランドは地震や津波、火災が起こった際に避難所として利用し地元住民や観光客の安全を守ることが出来る。

宿泊施設、食堂、カフェは地元住民の新たな雇用先としても期待でき、働きたいけど働き口がない定年退職をした人や、専業主婦を迎え入れる事が出来る。そうすることで住民の憩いの場、観光名所として姿を変えるかも知れない。

改築はおおよそ 2 億円程度必要だが廃校を利用しているため国庫補助制度やクラウドファンディングを活用して捻出する。維持費用は宿泊代金、食堂、カフェの収益でまかなう。そうすることで一時的な利用ではなく、長期的な利用が出来る。

今回の我々が提言する政策に該当するであろう SDGs の項目はスライドの通りです。我々が提案する施設では就労つまりは地域の雇用を生み出し、地方の特産物の販売促進を促せると思います。これは SDGs 目標 8 の 9 項目である「2030 年までに、雇用創出、地方の文化振興・産品販促（さんぴんはんそく）につながる持続可能な観光業を促進する」に該当し、また SDGs のターゲットとは少し乖離しますが就労による福祉効果で高齢者の健康促進が成し得られると思います。また我々の提案は単に就労施設を創設するだけではなく、そこに娯楽施設の要素も含む統合施設なので目標 11 の 7 である「2030 年までに、女性、子供、高齢者及び障害者を含め、人々に安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供」にも該当すると思われます。以上のことから 3 つの目標を達成できると思います。

私たちの結論は、登別を安心して住みやすいまちにするために統合施設を作ることです。幅広い年代が集まれる場所として、町全体で協力することで、町の活性化につながるのではないのでしょうか。

Bチーム

大東文化大学 B チームの発表を始めさせていただきます。発表は 3 年の永澤が担当しております。発表の流れはこちらの通りになっております。

また、政策を作成するにあたって、10 月 17 日からの 2 日間、登別市での現地調査を行いました。登別市社会福祉協議会 坂本様、登別市総合支援センターの高橋様 堀様　就労支援センターピアチェーレの竹田様、ご協力ありがとうございました。

それでは発表の内容に移ってまいります。今回のテーマである安心して暮らし続けられるまちづくりには様々な角度からの一体的な取り組みが必要です。

その中でも、安心して暮らし続けられるまちづくりには、誰ひとり取り残されない手厚い福祉サービスが重要になると考え、福祉に着目しました。

登別市では昭和 58 年をピークに人口が年々減少しており、令和 27 年には 31170 人まで減少すると予測されています。また、それに伴い高齢化率も高くなっており、働く世代の減少が見込まれます。またこちらのグラフから、ゆるやかですが市内の障がい者数も増加傾向にあることがわかります。これらの現状を踏まえ、今後登別市では地域経済の衰退、医療や介護などの社会保障費が増大されていくだろうと、私たちは予測しました。

地域経済の衰退、社会保障費の増大が進むと、手厚い福祉サービスの提供が困難になります。そうなってしまえば、安心して暮らし続けられるまちとはいえません。そこで私たちは、これらの課題解決に向けた政策を作成することとなりました。

それがこちら、産業福祉を導入した複合型道の駅の建設。です。生徒数が減少傾向にあることから統廃合の可能性が高い幌別東小学校は、国道 36 号沿いにあり、商業施設の建設に向いています。また施設内面積も十分に広く、道の駅へのリノベーションに向いていると考えられます。

私たちの考える複合型道の駅には、休憩機能などの本来の道の駅の機能に加えて、これら 3 つの機能があります。

具体的な施策がこちらです。一つ目に障碍者の働くピアチェーレ２号店、二つ目に障碍者が働くゆめみーる二号店、三番目に経済を促進する登別ブランドマーケットです。これらをテナント方式で道の駅に出店いたします。

まず初めに、障がい者の方がはたらくピアチェーレ２号店についてです。就労支援センターピアチェーレでは、主に精神障がい者の方の働きたいという気持ちに答える就労支援を行っております。就労体験の場のひとつとして、障がい者の方が働くカフェを運営しています。こちらのカフェを道の駅に支店として出店することで、障がい者の方の働く選択肢を増やし、より実践的な就労体験の場を提供します。

次に、高齢者の営むレストラン、ゆめみーる二号店についてです。ゆめみーるでは、誰もが安心してくらせるまちづくりを目指し、高齢者の営む地域食堂を運営されています。実際に私たちもゆめみーるで食事をしました。高齢者の方がいきいきと働く姿がとても印象に残りました。道の駅へ出店していただき、事業の拡大を図ることで、高齢者が生きがいを持って暮らせるまちづくりの推進を図ります。

最後に登別ブランドマーケットです。道の駅利用者へ６次産業化として登別産品の販売を行うことで、登別ブランド商品の販路を拡大し、持続可能な地域経済を推進します。

以上の産業福祉を導入した複合型道の駅を建設することで、三つの効果が期待されます。

一つ目は、障碍者・高齢者・健常者の交流を深めることで共存共栄できるまちづくりの推進です。道の駅での事業を通した取り組みにより、相互理解が進むことと考えます。二つ目は障碍者や高齢者の社会参加により生きがいや元気を持たせ、今後の社会福祉費用を削減する効果です。実際に愛知県豊田市足助町や、徳島県上勝町では、高齢者がいきいと働く雇用を創出することで、社会福祉費用の削減に成功しています。三つめは、登別ブランド商品の販路を拡大し、持続可能な地域経済を推進することです。道の駅による外需で、市内の経済を温めます。

私たちの政策に関連するSDGｓ項目はこのようになっております。

まとめになります。私たちの考えた道の駅の建設により、地域経済が振興し社会福祉費用が削減されるものと考えます。また、持続的な福祉サービスの提供が可能になり、安心して暮らせるまちづくりに十分寄与するものと考え、以上の政策を提言いたします。

これで大東文化大学Ｂチームの発表を終わります。ありがとうございました。

おわりに

今回のフォーラムでは、Ｂチームが入賞を果たし、結果を残すことができました。これは、リーダーの永澤君がメンバーを引っ張っていき、力を結集させていった成果だと思います。素晴らしく思います。

一方、コロナのため、Ａチームの全員が現地視察に行けなかったので、その制約が渡邊君にふりかかり現地で孤軍奮闘していたようでした。その中で渡邊君はベストを尽くしたと思います。

コロナの趨勢を見ていると、おそらくは来年はこれまでどおりの運営に戻れるのではないかと思います。来年、是非、通常の登別フォーラムを体験してほしく思います。

後日賞状と記念品（登別プリンと閻魔ラーメン）が届きました。

参加学生の声

政治学科２年生　菊池伶君

私は今回、登別政策フォーラムに参加させていただきました。政策を提言するという体験は初めてで不安でしたが多くの事を学ばせていただきました。政策を提言する創造性、いい政策提言を作ろうとチームで協力する協同性、その過程で議論することの難しさなど今まで私があまり経験してこなかった力が必要でした。また、自分の意見を言うだけではなくチーム全員の意見を取り入れた政策提言にする必要があるため、コロ

ナ禍の影響によりオンラインでの会議であったこと、現地研修が出来ず登別を直接見ることが出来なかったこともあり困難なこともありましたが、チームの特色がよく出た政策提言にする事が出来ました。結果としては悔しさが残る結果とはなりましたが、このフォーラムに参加する事で創造性や協調性、議論する力を少しは身につけたように思います。

さらに、様々な地域からたくさんの大学が参加しており、私が全く想像も出来なかったような独創性あふれる提言やしっかりと作り込まれ見やすくまとめられたプレゼンテーション資料を各大学の発表を見て私自身の未熟さを痛感し、そういう考えもあるのだと学べることも多くありました。

今回のフォーラムに参加して自分自身で能動的に考え、実行すること、チームで協力すること、自分の意見を相手に伝える力が必要であることを実感することが出来ました。この経験を生かして今後の学び、就職後の生活に活かしてきたいと思います。

政治学科 3 年生　張琨雨君

今回の登別政策提言を終えて、まず私が思うのは非常に貴重な体験をさせてもらったなと感じました。まず廃校という限られた敷地の中いかにして有効的かつ合理的に使うか、アイディアは思いつくのはそう難しくはないが、その後のいかに財源を確保するか、本当に廃校を使用してまで行う政策であるかという点は非常に難易度が高かったと感じました。また、他のチームの政策を見て自分たちの考えが及ばなかったところも見ることができ 大変勉強になった。今回は現地調査もできなかったこともあり、各チームが思うように進まない中ではあったが本当に素晴らしい政策を見せていただくことができた。そして自分の成長につながることができたと私は思う。今回の経験は何も政策だけに当てはまるものではなく、提言を考えている中で学習した SDGs は将来仕事でも生かすことができる、合理的な考えはさらに役立つと考えた。

本当に素晴らしい体験ができたことを感謝し、今回学習したことを全て将来に生かしていきたいと思う。またこのよう機会があれば是非今回できなかったこと、考えが及ばなかったところを補いより完璧なものに仕上げていきたいと思う。本当にいい体験をありがとうございました。

政治学科 3 年生　齊藤太一君

私達は岩橋教授のご指導のもと大東文化大学 A チームとして「第 15 回全国大学政策フォーラム in のぼりべつ」に参加しました。残念ながら今年もコロナウイルスが収まらないことや我が家では高齢の祖母の介護状況が重なり、私は県またぎの移動は控えるということで登別での現地調査を断念しましたが、同チームである渡辺君が登別に赴き現地調査を行なってくれたおかげで ZOOM という間接的な形にはなってしまったものの現地調査を行えて良かったです。この現地調査のおかげで現地では酪農が非常に盛んであると知り、我々のチームの主題である「産業福祉」に絡められ結果的にチームの提案する政策のクオリティーを高められたと思います。

また私自身は、教科書や文献を暗記するだけの座学ではなく実際に現地の現状を分析 し、自分達で解決策を思索する、いわゆるフィールドワークというのは初めての経験で 色々と新鮮でもありました。我々のチームは私を含めた政治学科 3 年生が 2 人、2 年生が 1 人、法律学科が 1 人と最初のうちはイマイチ議論が盛り上がらず、空回りをしていたのですが、提出期限間際になるとチームの誰もが焦りだし、各々がしっかりと自分の考えを持ちながら意見を出し合ったことにより議論も白熱し、一つの課題に取り組めたことにより得られた「協調性」や「コミュニケーション能力」、「企画の発案力」は何物にも代えがたい価値ある経験だと思います。また今回のテーマに深く関わっている近年話題の SDGs についてもこのフォーラムを通じて、一体どのようなものなのかを理解する機会にもなり 非常に勉強になりました。

審査では、我々が提案した政策である産業福祉を主軸に、そこに娯楽や宿泊施設の要素 も含めた統合型施設は、どうしても具体性や実際に運営した時のヴィジョンが欠けている と審査員さんに講評され、やはり現状起こっている問題に取り組むことの難しさを体感し ました。現地の住民が抱えている問題を適切に抜き出し、分析するというアクターが我々 には欠けており、少々風呂敷を広げすぎたと反省しています。念入りな事前準備、徹底した状況分析、それらを元にチームが一丸となって行う議論、そのどれかが欠けていても良い政策提言が完成しないということがよく分かりました。ただチーム全員が初の政策提言という不慣れ、かつ時間のない状況下で精一杯の提言が出来たという満足感もまたあります。

今回は授業の一環として政策提言に参加しましたが、何も今回学べたことは授業でしか生かせないとは思っていません。私は今年で大学 3 年生ですから、もうすぐ社会人の仲間入りです。例え私がどのような職に勤めようとも現状抱えている問題を分析し、そのことを同僚や先輩に提案することは、おそらく日常茶飯事となるでしょう。そこで今回学べたことを生かし、第三者を納得させられるだけのプレゼンや思慮深い社会人になれるよう に生かしていきたいと思います。

最後になりますが、今回我々のためにスライド作りのご指導やアイデアの提供してくださった岩橋教授、我々の現地調査に協力して下さった登別市の関係各所の皆様、こんな自分を受け入れてくれたチーム全員に改めてお礼を述べさせていただきます。本当にありがとうございました。

法律学科 3 年生　渡邊凌君

今回このフォーラムに参加して、提言する立場として勉強になった点が多くありました。まず、我々のチ

ームは登別市の今後の課題として、少子高齢化、特に高齢化の部分に着目してアイデアを出していきました。その過程で、他市で行われた成功例・失敗例を調査しましたが、それらを登別の特色とうまく関連付けて、より登別ならではのアイデアを出すまでに至らなかったところが反省点だったと思います。事実、フォーラム当日も議員の方々の質問の中で、「より登別らしさのあるアイデアを」とおっしゃっていました。少子高齢化という国全体の問題を、さらに登別市にフォーカスして深掘りしていけたら、よりよいアイデアにたどり着けたのではないかと思います。問題の深掘りだけでなく、多角的な視点を持つことが必要だったと感じました。アイデアが似たり寄ったりになったときに、別の畑で得た知識が新たな発想を生むという経験もありましたし、今後は幅広い知識と教養を身につけていきたいと思います。

アイデアに関しては、柔軟な発想力と実現可能性の両立にも悩まされました。登別に今までなかったような施設を作りたいという思いに対して、経営や運営母体の設定、運営資金と維持費用の捻出方法、土地面積に対する提案施設の数といった現実的な視点を考慮するとかなり制限されてしまい難しさを感じました。その中で、もし自分が運営するならば、という当事者意識を持つことが双方のバランスをとったよりよいアイデアに繋がるのではないかと思いました。この意識を持ってからは曖昧だった二者の中間地点が明確になっていったので、良い提言における鍵ではないかと思います。

また、発表当日は、別の角度からの学びもありました。他大学のチームの発表を見て、相手に興味を持ってもらえるようなインパクトのあるタイトルを付けていたり、パワーポイントの構成にも工夫があったりと、どの班にも個性がでていました。私は普段の学生生活でプレゼンする機会が今までなかったので、プレゼンのよりよい方法についても勉強になりました。

さらに、提言におけるヒアリングの重要性に気づくことができました。今回私は、チームの中で単身での実地調査、ヒアリングを行いました。事前にある程度提案はまとめていましたが、実際に現地の方のお話を聞いて、本当に求められている施設や困っていることについてなど、我々の想定していたものと乖離しているものもありました。提案する上では一度のヒアリングでは足りないこと、複数回行うことでお互いの要望と意見を擦り合わせていくことが、必要であると実感しました。対面でもそう感じたので、オンラインであれば尚更回数が重要になると思います。ヒアリングで得た情報を的確に班員に伝えて、短い時間で作り上げることはとても大変でしたが、それも含めて良い経験になりました。

今回のフォーラムに参加したことで、酪農をはじめとした登別市の魅力に触れることができましたし、SDGｓについても、これら 17 の大きな目標を達成する意義について、政策を立案する過程で深く学ぶことができました。現地調査を経て、新たに行ってみたい場所もできたので、またぜひ観光しに登別にお邪魔させていただきたいと思います。

最後に、私は他学科からの参加だったため行政に関する知識も少なく不安もありましたが、チームメンバーや先生方の存在があったからやり遂げることができました。自分自身の成長が実感できた、とても貴重な経験になりました。ありがとうございました。

政治学科 2 年生　杉野凪さん

今回初めて登別政策フォーラムに参加しました。一から自分たちで政策を作り上げることは初めてで、このフォーラムにもひとりで申し込んだため不安が多くありました。現地調査を行う前から自分たちで毎週 Zoom を用いて事前調査を重ね、実際に現地調査に向かうことでより深く登別の現状を学ぶことができました。

私たちのグループでは、「福祉を導入した複合型道の駅」をリノベーション案として提言いたしました。今まで福祉という分野は知識としてでしか触れたことがなかったので、実際に現場に行き自分の目で見ることはとてもいい経験になりました。Zoom での質疑応答の際には、かなり緊張してしまいました。また質問に対する事前準備が足りていなかったと感じました。それでも、先輩方と協力し政策を考え発表を終えた後は達成感を味わうことができました。

今回は、惜しくも今川賞には届きませんでしたが賞を頂くことができました。先輩方や先生に先導して頂くことは多くありましたが、自分の最大限の力を発揮できたと思います。私は来年のフォーラムにも参加するので、来年は主体的に提言ができるように努力していきたいです。

最後に、サポートしてくださった藤井先生、先導してくださった先輩方をはじめとする多くの皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

政治学科 3 年生　永澤息吹君

昨年度の「登別出前フォーラム In 大東文化大学」につづいて、唯一の複数回経験者として参加しました。昨年度は政策提言に必要な前提知識や多角的な思考力に乏しく、出場チーム中最下位と残念な結果に終わってしまいました。なにより、自信をもって政策を発表できなかったことが悔しく、自分自身の力不足を痛感しました。

今回のフォーラムでは、ゼミ同期の鈴木君、2 年生の杉野さんとチームを組むことになりました。初回のミーティングでは、二人に昨年の悔しかった経験を打ち明け「自信を持てる政策をつくり入賞する」というチーム目標を設定しました。

目標達成のため、夏休み期間を利用し週に一回ミーティングを重ねてきました。活発な意見交換からそれぞれの得手不得手がわかり、中盤には各々の役割が確立していました。また時には藤井先生からのフィード

バックをいただくなどして政策の本筋を固め、自信を持てる政策を作成することができました。
　迎えた成績発表では、総合得点 3 位として「登別市議会議長賞」をいただくことができました。これまでの努力や、昨年の悔しさを晴らすことができて大変うれしく思います。二年間で得た経験を今後のゼミ活動や、就職後の人生で活かしていけるよう邁進していく次第です。
　最後になりましたが、このような学びの機会を提供していだいた関係者の皆様に感謝を申し上げたいです。本当にありがとうございました。

政治学科 3 年生　鈴木道直君

　登別政策フォーラムの参加は初めてでしたが、政策を考えるのは大変でした。調査や話し合いをする中でわからない点があり、判断に迷うことが多かったからです。そのときはチームの人の意見を聞いて何とか解決することができました。私は人との共同作業は苦手ですが、このフォーラムを通してその重要性を改めて実感しました。大学ではさらにこうした活動を行っていきたいと考えています。人と共同作業をするときは今回の経験を思い出し、常に周りの存在を意識して行動していきたいと思います。